NO.80.2004.3.31.

半月遅れのX'masカードが…無事子ども達の手に!!

＝X'masカードキャンペーンにご協力いただいた皆様へ＝

拝啓　お忙しい毎日をお過ごしの事と拝察いたします。お変わりなくいらっしゃるでしょうか。
「チェルノブイリ救援・中部」で毎年行われてきたX'masカードキャンペーンは、今年も皆様からお送りいただいた約1,240通ものカードを、スタッフ一同とボランティアの方々に手伝っていただき発送いたしました。

皆様からは、X'masカード以外にも、スタッフへの手紙・封筒・切手・折り紙等までもいただきました。そして何より、皆様の温かい気持ちをいただきました。ありがとうございます。…が、謝らなければいけません。1月7日(ウクライナのX'mas)までに間に合うように発送作業を終え、国際EMS(速達)にて12月22日には送ったのですが、結局、子ども達に届ける事ができたのは、1月も半ばを過ぎてからになってしまいました。X'masカードは、州立小児病院の治療中の子ども達へ贈り、州立孤児院・市立小児病院・汚染地域の消防職員の子ども達にも届けられました。いつもなら、十分届いていたはずなのですが、1ヶ月もの間、X'masカードの詰まったダンボール箱は、ウクライナのどこをどうさまよっていたのでしょうね…。

こちらで決めた締め切りに間に合うように送っていただいた方、「1月7日のX'masに届けたい」と思っていた方、X'masカードキャンペーンにご協力いただいたすべての方にお詫びいたします。これにめげず、X'masカードキャンペーンは来年も行う予定です。皆様のご協力に感謝するとともに、今後の活動にご理解とご協力をお願いします。　敬具

(X'masカードキャンペーン担当の研修生成田さんが、協力していただいた皆さんに届けたお礼の手紙より)

〒466−0822　名古屋市昭和区楽園町137　1−10
チェルノブイリ救援・中部　代表：田中良明
郵便振替：00880−7−108610
TEL/FAX：052−836−1073（月・水・金　10:00〜17:00）
E−mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

2004年度ウクライナ講座が始まりました

第1弾は人気の料理講座（2月14日開催）

バレンタインデーのその日、チョコレートならぬ「ウクライナ料理」に舌鼓を打った参加者の皆さん。お米のスープとじゃがいものパンケーキは、ボリュームたっぷりなのに手間のかからないメニューだったので、時間的にもゆとりがありました。

講師の山崎タチアナさんが、各テーブルを回りながら、ウクライナの生活や食事のことなどを楽しく話され、料理に彩りを添えてくださいました。

次回のウクライナ講座は、4月17日（土）、あいちNPOプラザ（地下鉄名城線「市役所」下車、徒歩３分）にて行います。いよいよ、本格的にボランティア講座の開始です。

「救援・中部」の新しい事業「移住者村診療所支援」の対象先に、一年がかりでベッドカバーを作成しプレゼントします。ベッドカバーは、キルトを縫い合わせて仕上げます。次回の講座は、まず、そのキルト作りから始めます。一針一針に、皆さんの気持ちを込めてみませんか。ぜひご参加ください。

「総会＆チェル救ディーノ」のご案内

日　時：2004年6月12日（土）１３：３０～１６：３０
場　所：あいちNPOプラザ
参加費：無料（正会員以外の方も）

プログラム　第１部　総会（13：30～14：15）
主な議題　2003年度事業報告・2003年度決算報告
2004年度事業計画・2004年度予算（案）
第２部　２月訪問団の報告（14：30～15：15）
第３部　交流会（15：15～16：30）

「２月訪問団の報告」は、ちょうど「ソ連崩壊」と重なった前回の訪問から13年ぶりのウクライナ行きとなった小牧崇さんと、11月から事務局勤務となった石川博仁さんのお二人です。新鮮な目で、違った角度から見た現地の報告をお楽しみに。

そして、今回もたっぷりと交流時間を設け、皆さんの忌憚ないご意見に耳を傾けたいと思います。お誘いあわせの上、ぜひお越しください。

チェルノブイリ原発事故 18周年被災者救援 チャリティー公演会

2004年5月1日（土） in東濃

「多治見市文化会館 小ホール」

電話 0572（23）2600

開演 15：00
終演 18：30

【プログラム】
第一部：神田香織 講談（チェルノブイリの祈り）
第二部：
ナターシャ・グジー＆カーチャ
歌・バンドゥーラ演奏（ウクライナ民族楽器）
父 ミハイル・グジーの話
（チェルノブイリ原発事故その時そして今）
通訳：岩城 桂　ピアノ伴奏：堀江千穂

前売り自由席　小中高 1,500円　一般 2,500円
前売り指定席　小中高 2,000円　一般 3,000円

ナターシャ・グジー＆カーチャ

神田香織 講談
（チェルノブイリの祈り）

今回、核施設建設を強引に進める岐阜県東濃で、ナターシャ姉妹のコンサートと神田香織さんの講談を開催できることは、たいへん意義あることと思います。今、世界は原爆であれ、原子力発電であれ、劣化ウラン弾であれ、核物質を利用すれば、必ず核汚染が限りなく広がり、続く。人々は、核を監視し、おびえながら暮らすことになってきた今、チェルノブイリ原発事故を越えて、神田さんの講談、ナターシャさんの歌は、限りない人間愛への強い希望を歌い上げていると思います。これを機に、静かな第一歩を踏み出すチャンスになればうれしいです。（大泉讃）

主催：東濃チェルノブイリ18周年被災者救援の会
／TEL&Fax：0572-69-2157
後援：チェルノブイリ救援・中部 他

＜小学生が「アルミ缶集め」で買った車椅子は確実に現地に届けられました＞

ポレーシェ79号でもお伝えしましたが、昨年暮れ、静岡セルジオ小学校から車椅子３台のご寄付がありました。

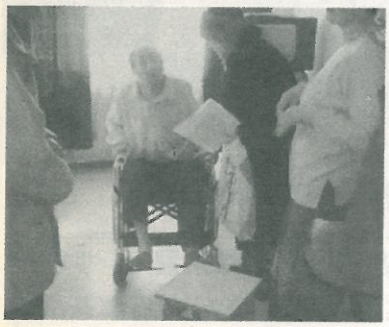
毎週木曜日の朝、生徒達がアルミ缶集めを１年間続けた努力の賜物が、この３台の車椅子になったのです。

子ども達の努力と願いに応えるため、現地で車椅子を必要としている被災者に、一日でも早く届けたいと考えました。

ただ、３台の車椅子の運賃の問題がありました。超過料金は大変高く、とても飛行機で運ぶのは無理です。でも、１台でもいいから派遣団に持っていって欲しい！…事務局・河田さんが、「だめもと」で派遣時に利用する航空会社（ルフトハンザ・ドイツ航空）に、「割引料金にしていただけないか」と、問い合わせをしました。

まもなく、ルフトハンザ・ドイツ航空の名古屋支店の方から返事をいただきました。「チェル救の活動についての紹介・趣意書が必要」とのことでしたのでそれらを送り、よい返事を待ちわびていました。…そして、「弊社といたしましても、人道的な活動のお役に立てることは喜ばしいことです。」とのメール。しかも、「３台すべての超過手荷物料金…免除」としてくださったのです。事務局は「ルフトハンザに、感謝！感謝！」と大喜び。チェル救の財政では、とても30数万円の超過料金は払えないのですから。

救援物資の輸送費に関しては、チェル救発足当時からお世話になっている「名港海運」にも、輸送費を格安にしていただいています。「できるかぎり、救援そのものにお金を使い、他の経費は削りたい」チェル救にとっては、とてもありがたいご協力です。今回もこのようなご支援に支えられながら、確実に現地に届けることができました。



今回ウクライナに届いた車椅子は、事故処理作業者障害者団体「リクヴィダートル」の一級障害者の３人の方々に贈られました。その一人ヴァシリ・ビルコさんの奥さんは「もう５年も外へでられなかったけれど、これで出かけられます。」と喜び、またニコライ・リトヴィンチュクさんは、言語障害があり喜びが言葉にならず、車椅子を届けた訪問団は「奥さんが流す涙に胸を打たれた」と報告しています。また、もう一台は、後日セルゲイ・ゴロドーニュクさんに届けられました。

（山盛）

＜カタログハウス・チェルノブイリ母子支援募金から助成を受けました＞

今回の代表団訪問における、北野さんと江成さんの「医療機器メンテナンスおよび医療技術移転活動」に対して、カタログハウスが『通販生活』誌上で呼びかけている「チェルノブイリ母子支援募金」から助成を受けました。「二人の渡航費・滞在費（420,560円）」と「メンテナンス機材購入費（1,200,000円）」の合計1,620,560円です。「メンテナンス機材購入費」で、「パルスオキシメータプルーブ・小児用人工呼吸器蛇管タイゴンチューブ・酸素濃度計・小児人工呼吸器ベビログ用酸素濃度セル・内視鏡光源装置ランプ」などを購入しました。これらはすべて、現地病院の医療機器の修理や、消耗部品の交換のために用いられました。

書類作成が遅れ、「出発直前に申請書を郵送する」というきわどい作業になったのですが、申請の満額を認めてもらうことができました。チェルノブイリ母子支援募金と、『通販生活』読者の皆様に心から感謝いたします。

（田中良明）

<センター内のカフェで語り合う、ボチコフスキー所長、チュマク氏、アントニューク氏>

ウクライナ非常事態省ジトーミル州支局発行

『火を鎮める者たち』2004年1月29日（消防士の日）号掲載記事より抜粋

民間医療センターでの消防士の子ども達の保養

州内の、放射性物質による汚染を受けた5つの地区の消防士の19人の子ども達が、1月2日から11日まで、ジトーミル民間医療センターで保養した。これは、古くからの友人たち――日本の慈善団体「チェルノブイリ救援・中部」（すでに10年以上にわたってチェルノブイリ被災者への支援を続けている）、前消防局長で事故処理作業者であるボリス・チュマク氏が代表を務める「チェルノブイリの消防士たち」の支援のおかげで可能になったことである。また、緊急事態省ジトーミル州局内（注：現在消防局が属している…あるいは、消防局が同支局を吸収して改名したのでしょう）の協力も得られた。

（センターの）医師たちによれば、子ども達のうち健康に問題がないのは3人のみ。残る16人は、長期にわたる本格的な治療を必要としている。しかし、この子ども達自身は、そのような問題に頭を悩ませていないようである。彼らにはセンターでの保養が気に入っているのだ。教育係のテチヤナ・ゲオルギイヴナが、子ども達の面倒を見ており、彼らはいろいろなゲームをしたり、クリスマスのお祝いの歌を練習したりした。

テレビを見ることも許可された。センター長の話では、何人かの子ども達は、全くテレビを見たことがないという。彼らの住んでいる村では、もう何年も電気が通っていないからだ。

楽しい自由時間や遠足のほか、治療も行われた。さまざまな治療、特に情報波療法・マッサージ・ヴィタミン剤・薬草療法などは、子ども達の今後の健康の基礎を作るものである。

一方、子どもたちと入れ替わりに、日本の団体「チェルノブイリ救援・中部」の資金で、第1及び第2カテゴリーのチェルノブイリ原発事故事故処理作業者たちが、民間療法による治療と保養を行っている。彼らのほとんどは、42歳から44歳までに健康状態が原因で年金生活に入り、多量の被曝による破滅的な影響がもたらした「心臓脈管系の疾患・運動器官の疾患・その他の重い病気」を抱えているのである。

チェルノブイリの涙を透かして子どもたちの笑いが・・・

出生数では、ナロジチ地区は州内で第1位を占めている。昨年1年間だけでも、ここで92人の子どもが生まれたのである。9月には、ナロジチ学校で3つの新入生クラスが設けられた。

「子ども達の笑顔を見ること――それが、私にとっては何よりの褒美なんだ。なんといっても、汚染地域では子ども達から笑顔が奪われているのだから。それぞれの年齢層に応じて選ばれたヴィタミン剤も、低下している免疫力を高めるという意味で役立つだろう」――キリチャンスキー氏は、自らの任務をこのように説明する。消防士たちにも可能性に応じて支援をしようとしている。平均年齢が28歳である消防士の若者たちは、「火事の際には、放射線量が数十倍にも上昇する」無人の村で消火作業にあたりながら、昼も夜も、容易ではない仕事に取り組んでいる。高い罹病率や頻繁な気分の悪化にもかかわらず、消防士たちは職場を放棄しようとしない。一方、この土地で生まれた子ども達は、実質上、「父親たちの仕事」と「生まれつきの遺伝因子」の人質となっているのである。

ウクライナ訪問 視察報告

「ナロジチ再訪」（小牧 崇）

ナロジチ地区は、チェルノブイリから西へ 70 kmに位置するウクライナ北部の汚染地帯。97･98年には、原さんが暖房給湯工事で長期滞在し、2001 年の訪問団に加わった倉田さんが、サマショーロのおばあさんに会い感銘を受けた、…伊那のメンバーにとって忘れがたい場所でもある。

２月 10 日朝９時、本格的な寒さが戻りつつあるジトーミルを発つ。道路は冷え込みにより凍結しているが、そんなことはお構いなしに、車はかなりのスピードでナロジチのある北へ向かった。コーラステンを過ぎる頃から、葉を落として寒々とした林と、うっすらと雪のかぶった牧場、そして丸太小屋の点在する風景が広がる。

＜中央が小牧さん（ナロジチ消防署にて）＞

11 時 20 分、ナロジチの町に入った。既に人の居ない家屋も見られるが、多くは手が入って活気も感じられる。ナロジチは今、ウクライナの中でも出生率の高い地区なのだそうだ。消防署を表敬訪問したあと、正午頃地域病院に到着。　1991 年の訪問時、玄関の前庭で放射線量を計ったところ、かなり高かった。入院患者も少なく、何よりも医療機器が子ども時代の田舎の診療所並みで、ほとんどないのに驚かされた記憶がある。今回は医療機器も増え、施設もそれなりに手が入り、患者の出入りも盛んであった。院長の案内で、薬品庫・外科病棟の手術室・レントゲン室・病室等を見学。「この病院で使用する薬品のほぼ半分が、救援中部の支援によるものだ」との説明を受ける。

病院見学後、車で５分ほどのところに住む、元奨学生のオクサーナさん宅を訪ねた。彼女は、奨学生として学校に通い、准医師の資格を取って村の診療所に勤めている。結婚して子どもが生まれたので、キリチャンスキーさんが誕生祝いを贈った。古い小さな丸太小屋であったが、室内は暖かく、小綺麗にして暮らしている。ナロジチの東部から南部には、事故直後高濃度汚染地帯として強制移住させられた「消えた村」が多い。その一つ「ヴェリキエ・クレシ村」に、ナースチャおばあさんを訪ねた。途中、いくつかの村を通過する。火災でペチカの跡しか残していない家、屋根も崩れて傾きかかった家、まだ十分に住めそうな家もあった。しかし、人の居ない村には、強烈な印象を受ける。車を 25 分ほど走らせると小さな教会があり、そこを右折。しばらく凸凹道を行ったところに、おばあさんがたった独りで住んでいる家があった。小さな丸太小屋。周囲は果樹であろうか、木が植えられている。周囲に人影はなく、刺すように冷たい風が吹き抜ける。玄関横に、カリーナの実が束ねて掛けられている。鮮やかな赤が、ここに人の生活があることを、ささやかに訴えているように思われた。定期的に来て世話をしている消防署職員の話では、最近おばあさんは「人に見られると命が縮む」と思いこんでいて、会いたがらないとのこと。結局、キリチャンスキーさんだけ会うことができ、我々も、定期検診のため同行した内科医も、会えずに終わった。その後ナロジチに戻り、最近開店したカフェで、消防署長・病院長を交えた遅い昼食交流会に参加して、ジトーミルに向かったのは 16 時 40 分過ぎであった。

前回の訪問後まとめたレポートで、私は「近い将来、この町は確実にゴーストタウンになるだろう」と書いた。今回再訪してみると、町にも病院にも活気が戻りつつある。政府が最近ここを避難地域から居住地域に格上げしたからだ。「原発事故は復興のない戦争」（たった一回の原発事故で）だとすれば、この格上げはむしろ被災者・地域の切り捨てでしかない。事実、ナロジチ地区の茸や木苺の汚染割合は 10 数年たっても増え続けているし（ポレーシェ 68 号）、まだ 30 代と思われる若い消防署長に健康のことを尋ねると、「50 歳まで生きられるかどうか」と答えが返ってきている。キエフではドイツ製の高級車が増え、ジトーミルのスーパーを覗くと品揃えも豊富。ウクライナ全体を見ると、上向きになりつつあるように見える。しかし、その中でチェルノブイリの被災者・地域は、置き去りにされはしないか。そんな不安を抱いて日本に戻った。

第５回ウクライナ医療支援活動報告（2004.2.06～2.15）

臨床工学技士 北野　達也

現地の実質活動日数が４日間という厳しい状況の中、いかに迅速で効率的な医療支援活動を行うかが、課題の一つでした。今回は、後輩の江成氏にもアシスタントをお願いしました。

４年前より、アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏（ジトーミル州立小児病院准医師）に対し、高度医療専門職の人材育成プロジェクトを行なっています。そして、新たに彼が通学した「国立ジトーミル技術工科大学」で、「医療安全管理学」「生体機能代行装置学」等の講義を行いました。

将来的には講座開設も考え、多くの人材を育成していきたいと考えています。

【国立ジトーミル技術工科大学】　「医療安全管理学」「生体機能代行装置学」の講義と、「日本の病院における臨床工学技士について」のプレゼンテーションをしました。講義開催が構内に掲示され、50名近くの学生と、副学長・教授陣達が聴講し、多くの質問があり、反響も大きく成功でした。

【国立ジトーミル技術工科大学附属医学研究所(隣接)】　欧州の医療機器メーカーなどが、新規開発医療機器のEU規格（TUV,CE等）を取得して商品化するために、この研究所でデモンストレーションや治験等を行なっています。ここでは、現地の医療施設に配置されていないような、最新の医療機器が配置され、最先端の治療も行なわれていました。

日本で言う治験目的の「大学病院医学実験センター」のような印象を受けました。

最新の治療を実施しているので、VIPの姿も見られるとのこと。

【ジトーミル市立小児病院】　昨年秋に船便で贈った「リサイクル医療機器」を開封し、それら機器の「設置・点検・操作及び治療方法・医療機器取扱い注意事項等」を説明しました。

寄贈した「Servo900C小児成人用人工呼吸器」のアラーム基盤不良を、アンドレイ氏・マヌイロフ教授等と共に、修理及び較正後、点検を実施しました。

一つの目的を達成させる為に、皆必死でした。国境を越えたエンジニア・チーム…熱いものを感じました。このとき、マヌイロフ教授は「継続技術移転の必要性」「技術工科大学での実習の必要性」を認識され、卒業生であるアンドレイ氏の活躍ぶりを、誇りに思われたに違いありません。

今後の課題は、リサイクル医療機器（消耗品交換・点検済の使用可能中古医療機器）は、臨床工学技士（医療機器の専門家）により精度の良いものを選び、「提供元でのメンテナンス」「船便梱包直前のチェック」「現地で設置・点検、必要に応じ部品交換及び修理」等の３回のチェックを行い、即座に使用できる状態にすることです。

【ブルシロフ地区プリヴォローチェ診療所】　ポータブル心電計（DC12V 電池式）の動作点検後、操作取扱説明を実施しました。

【州立成人病センター】　院内と「新規開設人工透析センター」を視察しましたが、日本の20年前の治療を行っていたので、技術移転をしていく必要性を感じました。このほか「ブルシロフ地区病院」「ジトーミル州立小児病院」においても活動を行いました。

今後は、医療機器のオペレーター（操作者）としては勿論の事、それらの医療機器の保守・点検を実施する高度医療専門職を継続的育成するためにも、ジトーミル技術工科大学において講座を設け、州立小児病院・市立小児病院・地区病院等においても、安全で有効に医療機器を使用してもらえるような人材育成を目指します。これらの人材育成事業は、さらに医療の質を高め、小児病院に入院する重症疾患の子ども達を救うだけでなく、その子ども達が、将来自国にて就職先を確保し、自立できるプロジェクトになると考えています。次回も、新たな医療支援活動報告ができればと願っています。

医療支援活動に参加して（臨床工学技士　江成　美絵）

「思ったほど、寒くないな。極寒の国だと思ってたのに…。」というのが、キエフに初めて降り立った時の感想です。ウクライナ共和国ジトーミル州に渡航…。私は、初めて訪れる国に対しての大きな期待と小さな不安を胸に抱いて、参加しました。その大きな期待は、「臨床工学技士（病院で医療機器を操作・保守・管理などを行う有資格者）として何をすべきか？」「役に立ちたい！」「がんばるぞ！」でした。 小さな不安は「見知らぬ国での生活はどうしよう。」「食べものが合わなかったらどうしよう。」…etc.でした。今回の訪問で、とても感動した事が二つあります。

一つは、遠く離れたウクライナ共和国ジトーミル州の病院で、日本の臨床工学技士・ウクライナの准医師（アンドレイ氏）・エンジニア達が一丸となって、日本から送られたリサイクル医療機器（人工呼吸器など）を再び稼動させた事です。その作業中、北野さんが「僕達の手で、この人工呼吸器にまた命を吹き込もう！」とおっしゃった言葉が、とても印象的でした。

二つ目は、ジトーミル市立小児病院において、内視鏡業務（例えば胃カメラなど）の院内講義をさせていただいた事です。とにかく初めての事でしたので、「緊張しました…。」の一言に尽きますが…。現地の医師・看護師さんたちが、私の講義に真剣に耳を傾けてくれ、「少しでもお役に立てたのだ。」と実感できたことがとても嬉しかったです。今回の渡航では、いままで経験できなかった事がたくさんありました。それらをすべてこの場で語ることができませんが…とてもすばらしい経験をしました。次回機会があれば、皆様にお話させていただきたいと思います。　ウクライナの滞在は、決して長かったわけではありませんが、とても心の温かいジトーミル州の人達と接して、私が最初に持っていた小さな不安はいつのまにか消えていました。今後も、「人としては勿論の事、一人の臨床工学技士として何ができるか？」を考えながら、被災された方々への継続支援をしていきたいと思います。この機会を与えてくださった皆様に、感謝しております。本当にありがとうございました。

ウクライナの眺め（石川博仁）

チェルQに来て間もない自分が、ウクライナの地を踏むことになるなんて考えてもいませんでした。最初に感じたのは、元（？）社会主義国家であったことに起因する、公務員の無愛想さです。入国管理などの部署で働く人たちは（もちろん日本でも似たり寄ったりではありますが）、とにかく態度が冷たい。これはまあ、お国柄と思って我慢するべきでしょうか。ただし、スーツケースなどの荷物が届かなかったという事件があって、24 時間ヘルプデスクのお姉さんたちのお世話になったときは、少しだけ彼女らの人間味に触れたようにも感じました。「人間ではなく、仕組みが悪い」という感想を（甘いかも知れませんが）持った次第です。 いざ、キエフからジトーミルに入ってみると、寒さはそれほどのものでもなく、ウオッカで歓待してくれる人々に迎えられて、私達はすっかりアル中になりました（冗談です）。事故処理作業者の人たちや病院の先生方も、みな上機嫌で迎えてくれましたが、いかんせん、医学的な知識もこれまでの支援状況も詳しくわからない自分は、見せてもらえる施設や話される現地の状況などを、真剣に見聞きしているのが精一杯で、仕方がないとはいえ不満が残りました。「今度来るときは、ぜひとも相手を質問攻めにできるようになろう」と決心しています。滞在中で一番印象に残ったのは、サレジオ小学校から寄贈された車椅子を、事故で被災して障害者となった人に手渡したときのことです。言語障害もあるその男性に付き添っていた奥さんは、涙を流して感謝してくれました。こういう場面に出会うと、この仕事は必要なのだという気持ちが、改めて芽生えます。結果的に、今回の訪問は、自分にとってはまず状況を知るきっかけであったと思います。どんな支援の形が望ましいのか、活動の中身を考えていくという仕事はまだ始まっていないのです。訪問団のみなさん、お疲れさまでした。今後ともよろしくお願いします。

教訓を与える講義

技術工科大発行の新聞
『科学技術』2004年3月号より

恋人たちの祝日も間近の2月12日、ジトーミル技術工科大学の会議室に、医療機器・システム講座の教員と学生、その他ウクライナにおける医学の発展に無関心ではいられない人々が集まった。日本からの親愛なる客人である北野氏の、「生体機能代行装置学」の講義を聞く(より厳密に言えば、観る)ために集まったのである。

北野氏の**講義の第一部**は、日本の臨床工学技士の業務の特色に関するものであった。日本のバイオエンジニアの養成課程は、ヨーロッパの、とりわけウクライナのそれとは本質的に異なっていることが明らかになった。教育は3年ないし4年にわたり、卒業試験に合格した後、総合的な性格の業務に携わることができる。就職して2年ないし5年たった後、専門を選択する資格ができ、さらに試験を受ける。

生物工学・医療機器の使用に携わる技師の主な専門分野は以下のように分かれている。

1) 人工呼吸器
2) 高気圧治療装置(気密室)
3) 人工心臓
4) 人工腎臓
5) 内視鏡
6) 総合的業務、高度技能資格

講義の第二部は、各種の医療機器のプレゼンテーションであった。我々の見守る中、在宅用人工呼吸器・呼吸運動記録器(呼気と吸気の分量の変化を記録する)・パルスオキシメーター(呼気・吸気中の酸素濃度を測定する)、その他の我が国の医療現場でしばしば非常に不足している、日本の最新技術の成果が映し出された。

プレゼンテーションは、かの「マイクロソフト・パワーポイント(日本語ヴァージョン)」プログラムを用いて行われた。もちろん、これは当然といえば当然のことなのだが、しかし見慣れた「スタート」の表示のかわりに、画面になにやら不可思議な象形文字が現れた時、少なからぬ聴衆の顔に仰天した表情が浮かんだのであった……。

しかし、これは単なる余談にすぎない。ちなみに、北野氏自身は、初めてのジトーミル訪問ではない。以前、州立小児病院を訪れ、肺炎治療のための排痰法を成功裡に実践したこともある。

講義の第三部で、北野氏は、日本の病院で医師や技士が遭遇する問題について率直に語った。人工呼吸器の使用に際しての事故の統計を見ると、その大多数は「使用前後の機器点検が不充分だった」ために発生したことが、容易に理解できる。その原因は、技士の訓練が行き届いていなかったこと、あるいは、形式にこだわり強い責任感を持っている日本人にさえも見られるケアレス・ミスである。

講義の後、聴衆は北野氏に山のような質問を浴びせ始めた。

それに対する答えを聞いて、我々が知ったのは次のようなことである。

1) 日本の病院では、患者100名につき平均5名の技士が働いている(**医療機器・システム講座の卒業生の就職先はこれだ!**)。
2) バイオエンジニアの教育カリキュラムの50%は技術関係、残る50%は医学関係である(本学の上記講座のカリキュラムでは、無線工学のさまざまな科目がある中で、医学関係は生理学のみ)。
3) 患者に傷害を与えたり、患者の死亡をもたらしたりする過失事故を起こした技士は、免許を失うこともあるが、日本ではこのような場合に払う罰金を肩代わりする保険会社が存在している。(そういう会社が存在しているということは、過失事故がそれほど多くはないということであろう。)

話を終えるにあたって、北野氏は、ケネディ大統領の言葉を自分流に作り変えて引用した。

「自分の仕事が自分に何を与えてくれるかではなく、患者のために自分は何ができるかを問え」というものだ。筆者の考えでは、非常に興味深く、また教訓を与えてくれる講義であった。諸君の感想はいかがだろうか? ワトソン博士

連載 39

チェルノブイリのツバメの異変

放射能は遺伝子を破壊する。その結果、白血病や各種のガン・先天異常などが起こることは良く知られている。チェルノブイリの放射能は、人間ばかりでなく、野生生物の世界にも大きな変化をもたらしつつある。今回は、チェルノブイリの近くに生息するツバメに起こった異変を紹介する。

この結果は、スウェーデンとフランスの科学者の共同研究で分かった。

（論文は、「Nature：Vol.389, 593 頁（1997 年）」に掲載されている。）

白子のツバメ

ツバメ等の鳥類は時々羽が真っ白な白子（アルビノという）の突然変異を起こす。これに注目したスウェーデン農業大学の動物繁殖学者のハンス・イレグレン等は、チェルノブイリの汚染地域に住むツバメの白子突然変異の発生率と、ウクライナのカネフ（非汚染地域）とイタリアのミラノ（非汚染地域）での白子発生率を比較した。白子は、鳥類にとっては、他の仲間よりも目立つので天敵の目に付きやすく、また異性の相手にされにくいので、進化的にはマイナスの要因であり、負の適応例と考えられている。結果は明らかだった。データの一部を紹介すると次のようになる。

ツバメの羽の白子突然変異

ツバメ試料の採取時期	チェルノブイリ汚染地域	カネフ（ウクライナ非汚染地域）	ミラノ（イタリア非汚染地域）
1986 年以前	0.0 %	0.0 %	0.0 %
1991 年	16.2 %	0.0 %	ー（データなし）
1996 年	13.3 %	1.9 %	1.7 %

3ヵ所とも、チェルノブイリ事故以前に採集されたツバメに、白子は見られなかった。

しかし、事故から 5 年経った 1991 年以降、汚染地域では白子の割合が激増した。各地域と年代のツバメのサンプル数は、17～180 羽とばらつきがあるが、統計的に、事故前と事故後では、明らかに発生率が違う。また、非汚染地域のはずのカネフやミラノでも、10 年後の白子発生率が、わずかだが増えたのは、汚染が予想以上に拡散したことを思わせる。

白子突然変異は生殖細胞に起こった

次に彼らは、この白子突然変異が、「体細胞の突然変異」で偶然多くなったのか、それとも、「遺伝性のもの」であるのかどうかを調べた。その結果、「突然変異は、明らかに生殖細胞レベルで起こったものであり、代々遺伝している」ことが分かった。

データの分析の結果、チェルノブイリの汚染地域における、この生殖細胞の白子突然変異の発生率は、非汚染地域のそれに比べて、2 倍から 10 倍高いことが分かった。

白子突然変異が、適応上マイナスであるということは、この突然変異増加は「適応能力を失った、進化的には逆行現象」であることを示している。チェルノブイリの放射能は、深く静かに自然界をも蝕みつつあるのだ。（河田）

竹内さんのウクライナ便り

最近の報道によれば、ウクライナの国内総生産・平均月収・外資導入額などの経済指標は、すべて上向いており、「2003 年中の国内総生産成長率が 9.3%(政府発表)」というような数字は、今の日本から見ればうらやむべきものかもしれません。

実際、私が街中に出かけるのに使う地下鉄(…といっても、私の住んでいるドニエプル河の左岸では、地上を走っているのですが…) の窓から眺めると、盛んに新しい建物が建設されています。というか、数年前までは建てかけたまま放置状態になっていた建物も、いつのまにか完成し、そのとなりに、今度は目に見える速度で別の建物が造られていたりします。

ここ数年でのもう一つの変化は、公共交通機関内で、携帯電話を取り出す人が出現したことです。以前は、携帯電話を使う人なら、バスや地下鉄に乗ることはなく、ベンツや三菱に乗っているというのが、一般的なイメージでした。

つまり、それだけ携帯電話を使う、あるいは使える、人が増えたということです。そして、地下鉄車内での物乞いも減りました。

車内での物乞いというのは、駅で乗り込むと同時に、ひとしきり乗客に訴えの言葉 (障害者・孤児・子どもの病気などの理由で困窮している･･･)をかけ、しかる後「集金袋(?)」を下げて車内を歩く、というものです。

しかしこれは、「困窮者の数が減ったというよりも、物乞いの実入りが少ないからではないか」と私は思います。

私がこちらに来た９年と半年前頃には、かなりの乗客が、少額紙幣(当時はインフレのため硬貨が使われていなかった)を恵んでいましたが、今ではほとんどの人が無表情にやりすごしています。物乞いに代わって、その後、雑誌・新聞・手提げヴィニール袋・おもちゃなどの車内販売(?)が出現しました。パターンは物乞いの場合と同じで、車内に乗り込み、声を上げて宣伝文句を並べ、価格を告げ(「店売価格の 2 割引！」など)、その後車内を売り歩くというもの。ものによっては、それなりに売れています。

あと、楽器を持ち込んで演奏し、お金を集めるというのも、私の使っている路線ではわりによくあります。ヴァイオリンの中年男性、ギターと管楽器の若者二人組(自作の歌をコーラスし、管楽器で間奏を入れる)など。

地下鉄の乗り換え通路に立つ物乞いの人たちは、あまり減ったとは思えません。アフガン戦争あたりの傷痍軍人かと思われる隻腕隻脚の人、盲人、車椅子の若者、杖にすがる老人、子どもを膝に抱えた母親など。なぜか、使い捨てのプラスチック・コップや洗ったマーガリンの容器などを手にしたり、足元に置いたりして、硬貨を入れてもらう場合が多いようです。

政府が判定する最低生活費という数字があり、現在のヤヌコーヴィチ内閣成立後、平均月収がやっとそれを超えたというのが、内閣の手柄であるかのように言われていますが、最低賃金額や一般の老齢年金額は、今でも最低生活費をはるかに下回っています。そして経済成長とともに、医薬品の価格なども上がっています。

国民健康保険制度は存在せず、民間の保険会社の健康保険に、個人で加入できる人は限られており、社員の肩代わりをして保険に加入できる会社というのもごく少数。

「医療は無償」という建て前だけが残っているので、病院(ほとんどが未だに公立)が行政の予算でまかなえないものは、包帯や手術用手袋から使い捨て注射器に至るまで、患者が実費を負担するという状況に、基本的な変化はありません。手術に際しては、執刀医に個人的な謝礼を渡すという慣行も同様です(医師の給料も、公立病院では決して高くない)。もう少し国民に顔を向ける政治家が登場し、この偏頗な成長が正されるまで、庶民の根深い政治不信が消えることはないでしょう。　　(3月18日)

事務局便り

名古屋で41回目の春を迎える。ようやく定年退職で自由の身になるが、多分日常やる事は今までと変わるまい。今日は昨日のように、明日も今日のように、と生きてきたのだから。

チェルノブイリ救援・中部を皆と立ち上げたのは1990年4月で、こちらも14年目になる。海外援助の何かも分からず、とにかくチェルノブイリの被災者を助けたい、との思いだけで皆と一緒に始めた運動だ。今から思えば、過去には的外れな事も不適切な事もあったかもしれない。今では事務局体制も整備され、法人化で仕事もシステム化され無駄はないが、立ち上げ当初の熱気も薄れた気がしないでもない。人の営みにとって持続は大きな力だが、熱気を長期に渡って維持するのは難しいものだ。「チェルノブイリを風化させまい」「二度目のチェルノブイリを起こさせまい」という、チェル救の全国の支援者1,200名による絶え間ない励ましこそが、我々と現地窓口のホステージ基金の活動を支えている。（河）

<読者のお便り紹介>

成田様　クリスマスカードの件、わざわざ写真入のお詫びの手紙を書いていただいて、本当にありがとうございます。私は“チェル救”に紹介していただいた、リューシャ・カジェルチュクさんに今でも2回ぐらいは、手紙を出しています。お孫さんが5才で、来年は小学校に入ると、先日写真を同封してくれました。チェル救のクリスマスカードキャンペーンは、過去何回か参加しましたが、今回のように写真を受け取ったのは初めてで、うれしいです。私の作ったクリスマスカードは、きっと誰かの役に立ってる…と漠然と考えながら、毎年キャンペーンがあると、参加します。

今回、写真をいただいて、ぼんやりとした意識が、「あ、やっぱり役に立ってる。」と、はっきりしたものになった…気がします。これで続けていけます。2004.02.29　八戸市（T.A）

ホームページ更新のお知らせ

みなさん！「救援・中部のホームページ」をご覧になったことがありますか？
（http://www.chernobyl-chubu-jp.org）

長らく更新されていませんでしたが、最近リニューアルを進めています。

「河田レポート」や「竹内通信」など盛りだくさんですよ！「伝言板」も設置しましたので、ぜひ遊びに来てくださいね。首を長くして待ってます。（石）

編集後記

☆近年、「花粉症は克服したの！」と喜んでいたところ、知人宅で、35kg(！)のデカ犬に押し倒され、おもちゃにされた途端…鼻が壊れた。なんてこと、とってもかわいい犬なのに…（鼻汁）　（美）

☆抱きしめたいほど愛おしかったストーブが、ある日突然うざったくなる。それが私の春本番。（佳）

☆私の尊敬する河田さんが、定年退職を迎えられた。（本当にお疲れ様でした。これからもよろしくお願いします。）風の便りによると、**4月25日（日）13:30～16:30、名古屋YWCA（栄）のホールで、「記念トークライブ（会費1,500円）」**が開催されるらしい。（・・・妙に具体的な春風の便りである。）這ってでも出かけて行って、お話を聞こうと思う。皆さんも是非どうぞ！！　（J）

〒456−0022　名古屋市熱田区波寄町　20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX　(052) 871−9473